

第 65 回山口大学医師会・山口大学医学部主催 医師教育講座（体験学習）

「身につけておきたい呼吸器疾患の日常診療スキル」

と き 平成 30 年 1 月 21 日（日）9：00～12：20

ところ 山口大学医学部 総合研究棟 2 階講義室

指導印象記

山口大学医学部附属病院

呼吸器・感染症内科 平野 綱彦

平成 30 年 1 月 21 日、山口大学医学部の総合研究棟 2 階 S2 講義室において、山口大学大学院医学系研究科呼吸器・感染症内科講座の担当にて、第 65 回山口大学医師会・山口大学医学部主催医師教育講座（体験学習）を開催させていただきました。

今回のテーマは、呼吸器診療についての理解を深めていただくために、普段我々が行っている診療スキルを体験していただくことを主眼とした、「身につけておきたい呼吸器疾患の日常診療スキル」とさせていただきました。

当講座は、2015 年 7 月に開設され、まだ 3 年にも満たない講座であるため、このような県内の医師を対象とした教育講座は、まさしく我々にとっても、初の“体験学習”の機会となりました。当日は非常に寒く、また、貴重な日曜日にもかかわらず、東は柳井から、西は下関まで、県内各地から多くの先生方にご参加いただきました。



冒頭に、松永和人 教授が開会の挨拶をされ、体験学習前半は、喘息や COPD の病態評価として検査に関する簡単なレクチャーとそのハンズオンを、2 パートに分けて行いました。まず呼吸機能検査の解釈のための講義を私（平野）が、次に呼気一酸化窒素（NO）検査の解釈のための講義を大石診療助教が行いました。各々の講義後、末竹診療助教が被験者となって、それぞれの検査のデモンストレーションを見せ、受講者の方々に検査のハンズオンをしてもらうという形式をとりました。その後、受講者に各検査を実際体験いただき、検査のコツやピットフォールを説明しつつ、自分自身の呼吸機能の波形、値や呼気 NO 値を評価してもらい、解説やディスカッションを通して、各々の検査の理解を深めていただきました。

後半部分では、薬剤師免許も持つ山路助教が COPD や喘息における吸入薬の重要性についての講義を行った後、呼吸器疾患の代表的吸入薬の吸入支援の体験として、吸入指導に関するシナリオを用いて、各種吸入薬の吸入指導のロールプレイと吸入体験を行って頂きました。この体験学習パートの冒頭、山口赤十字病院呼吸器内科の國近

先生が、吸入薬の吸入方法を完全に勘違いした山路助教扮する患者に、短い診察時間内で吸入法の間違いを冷静に指摘し、正しい吸入法を指導する医師役になるという絶妙なデモンストレーションを見せてくれました。その後のロールプレイでは、吸入療法のステップアップをめざす会に共催いただき、山路助教がリーダーとなって、國近先生、当院の薬剤師、宇部医療センター呼吸器内科坂本医師、大畑医師、大石診療助教にファシリテーターを務めてもらいました。実際には 3 人一組のグループになっていただき、患者役、吸入支援者役、観察者役の役回りを 3 シナリオ、3 種類の薬剤で各々経験していただき、吸入支援の重要性を認識いただきました。開始当初は、吸入指導の難しさに戸惑われておられる受講者も見受けられましたが、徐々に慣れていき、最後は皆様和気あいあいとロールプレイを楽しんでおられる様子でした。

最後に、松永教授から閉会の挨拶がありました。その中で、今後今回のような体験学習を、受講者の方々が一緒に働いている看護師、薬剤師、検査技師の方々と一緒に行っていきたいといった宣言がなされ、参加者の皆様からも多数のご賛同を得て、閉会させていただきました。今回当科としては、初めての医師生涯教育講座で、至らない点も多々ありましたが、受講者の方々の温かいお気持ちに非常に助けて頂き、この場をお借りして深謝申し上げます。またこの度は大変貴重な機会をいただいた山口県医師会の皆様に深く感謝申し上げます。最後に、今回の体験講座を開催するにあたり、当講座、当院薬剤部、宇部医療センター、山口赤十字病院呼吸器内科、吸入療法をめざす会の方々からご助力いただいたことに、厚く御礼申し上げます。本稿を終わらせて頂きます。

受講印象記

厚狭郡医師会 伊藤 光佑

平成 30 年 1 月 21 日、第 65 回山口大学医師会・山口大学医学部主催医師教育講座を受講しました。今回は呼吸器・感染症内科が担当でテーマは「身につけておきたい呼吸器疾患の日常スキル」でした。私は同講座の立ち上げメンバーでもあり、現在も毎週勤務させて頂きながら呼吸器内科を主

とした診療所を運営しているので、指導側と受講側、双方の視点で感想を書かせて頂こうと思います。

1 コマ目は平野綱彦 准教授による「呼吸機能検査の解釈及びハンズオン」と題したレクチャーでした。まずはこれから導入する先生には大切なコストのお話。機械自体がそれほど高価ではないので、週 1 回の検査でも 1～2 年で回収できるとの事（実際にはフィルターの定期交換や点検のための人件費などのランニングコストはかかります）。そして検査の実際について。健康成人と COPD 患者さんの典型的なフローボリューム曲線の形状の違いがどのようなメカニズムで出るのか（COPD 患者ではピークフローの低下と末梢気道障害を反映して小さな山で下に凸のカーブを描く）、説明がありました。最近の呼吸機能測定器は肺年齢を表示するものが増えており、どのような事を反映して年齢を計算しているのかを解説して頂きました。また、COPD のステージが FEV1% ではなく %FEV1 による事、その理由としては COPD の悪化に伴う FVC の低下、残気量の増加を認める事の説明がありました。検査結果の解釈については比較的細かいところまでご教示頂きましたが時間の関係上、全てを理解する事は専門外の先生にはやや難しいという印象でした。しかし、ハンズオンで実際の被験者を体験できた事で、検査のやり方が結果に大きな影響を及ぼす事が容易に理解できた事がよかったですと思います。再現性のある検査にするために、検者も工夫して被験者に最大限の努力で検査を受けて頂いている事が実感できました。さらに、フローボリュームカーブの形状による解釈も講義に含まれていたため、数字だけを見ていると誤診に繋がる可能性がある事を感じて頂けたと思います。呼吸機能検査は①検査がきちり出来ている事、②出た検査結果の解釈ができる事の二段階で成立する検査であり、これは教科書で学ぶより実体験する事が望ましいと思われ、今後もこのような機会があると良いなと感じました。

続いて、大石景士 先生による「呼気 NO の解釈およびハンズオン」。松永教授の赴任以降、山口県内に急速に広まった呼気 NO 濃度測定検査で

すが、まだまだ一般的ではないと考えられており、参加者の中でも導入されているところはほとんどないとの事でした。大石先生から最近話題の気管支喘息の多様性（フェノタイプ・エンドタイプ）についての話があり、呼気NO濃度の解釈についてエビデンスを示しながら解説頂きました。ハンズオンでは実際に、呼吸機能検査よりは手軽にできる事が実感できました（1回あたりのコストが高くて自施設ではデモが出来ないため久々に測定できたのもいい機会でした）。解釈に注意は必要ですが、呼吸機能検査よりは比較的理解しやすい印象ではありました。しかし、呼気NO測定検査はランニングコストがかなりかかるのに対して診療報酬は低く設定されている印象であり、検査の頻度が少ない施設では導入へのハードルは高い印象です。参考として呼気NO測定器の各機種の特徴や、どのような症例に積極的に使用すると役に立つのかななどを説明して頂くと、新たに導入を検討される先生の助けになるのではないかな、と感じました。

トリは山路義和先生による「喘息・COPDの病態と吸入指導の重要性」について。ロールプレイを通じて、吸入指導の重要性を解説して頂きました。模範として医師役に山口赤十字病院の國近尚美先生、患者役に山路先生を配した寸劇？を披露して頂き、迫真の演技により会場が笑いに包まれました。リラックスしたムードで参加者がチー

ムに分かれてのロールプレイを体感でき、吸入指導の難しさを体験することが出来ました。周囲の先生方の声を伺うと、そもそも複数のデバイスを使用される先生が少ない事と、実際に患者さんに吸入指導されている先生は少ないようでした。吸入ステロイド/長時間作用性 β 刺激薬の配合剤が複数あり、使い慣れておられない先生も多数おられたようで、「こんなやつもあるのか。これほどのように使ったらいいのか」と吸入指導よりも薬剤そのものに困惑されていました。吸入指導の前に時間があれば、実際の治療薬の簡単な概説もあればより良いな、と感じました。普段、患者さんに直接吸入指導をしています、このような会では新たな発見もあり、大変勉強になりました。

全体の印象として、松永教授が積極的に参加者やスタッフに声をかけておられ、スタッフも宇部医療センターの先生、研修医や医学部の学生さん、留学生など大勢参加されており賑やかで明るい会場の雰囲気でした。また、大学病院の病棟で大変お世話になった薬剤師の西川先生などもファシリテーターとして参加されていて懐かしく、楽しい時間を過ごす事が出来ました。また、機会があれば参加させて頂きたいと思います。

